

【ポスター発表】

軽度知的障害児へのひきこもり予防支援方法の検討

—ひきこもり支援機関の実践からスクールソーシャルワークでの予防支援のあり方を考える—

○ 大阪人間科学大学 山中 徹二 (008610)

キーワード：軽度知的障害・ひきこもり予防支援・スクールソーシャルワーク

1. 研究目的

日本国内に仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6か月以上続けて自宅にひきこもっている状態にある者は約70万人と推計されている。その中には軽度知的障害のあるケースが多く含まれていると報告（H19～H21年度「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」齋藤万比古）されており、その社会的対応が求められている。しかし、ひきこもり予防の必要性は認められているが、それは医学的観点や心理的側面からの支援を中心としたものであり、ソーシャルワークの視点から予防支援のあり方を検討したものは見受けられないのが現状である。予防支援を考える場合、小中学校の義務教育時、また高等学校在籍時のより早い段階でのスクールソーシャルワーク（SSW）による学校内での予防支援が考えられる。また2014年の子どもの貧困対策大綱策定により、今後4年間で約10,000人に増員される予定であることから学校をベースとしたSSWでのひきこもり予防支援が有用になるものと考えられる。

本研究では子どもを取り巻く環境を視野に入れたSSWでの軽度知的障害児のひきこもり未然予防のための支援方法論研究を行う。そのためにまず、ひきこもり支援に焦点化している学校外の支援機関の実践から軽度知的障害児のひきこもり予防支援に求められる視点やその方法をまとめる。そして今後のSSWによる軽度知的障害のある子どもへのひきこもり予防支援の必要条件のあり方を探る。

2. 研究の視点および方法

ひきこもり支援機関における実践の視点と方法に焦点化し、「ひきこもり支援における現状と課題」「ひきこもり支援における特有の支援視点や方法」について把握、検討する。全国6つの都市で子ども若者支援に携わる支援者11名に対しインタビューを実施した。質問内容は①ひきこもり支援での軽度知的障害のある方への支援の現状や方法について②18歳以上のケースで、これまで（特に学齢期中）何らかの社会資源の利用はあったか③現状からみて、その方々に必要だったと思う予防的な支援はどのようなものか。以上3点について半構造化面接を実施した。インタビュー内容は逐語録にまとめ、修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の手法により分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査対象者に対しては場所や個人が特定されないよう十分な配慮をすること、また学会や学会誌などの学術的な目的以外に使用しないことを約束した。

4. 研究結果

軽度知的障害児者のひきこもりに関する「予防や早期支援での具体的視点」として「相談時の保護者の思いの汲み取り」「家族が抱える生活問題に目を向ける」「相談主訴とニーズのギャップ理解」「支援の有効性と実効性への信頼獲得」の必要性がある。相談に訪れる保護者に対して、子どもの「知的障害」という部分に対してさまざまな思いがあることを理解し推察すること、相談主訴とニーズの違いに目を向けること、そして保護者やその家庭が生活課題等を有している可能性を考慮する視点も同時に必要であるということが挙げられた。また問題が表出してから支援の重要性が示された。その際には「子どもの年齢層に応じた支援展開」や「18歳以降に初めて問題が表出する社会構造」があり予防支援の多様な視点や支援の困難さが明らかとなった。また、ひきこもり状態にある子どもが相談機関などの社会資源につながった場合は、学校とは異なる「学校外部の社会資源で求められる対応力」が必要としている。

ひきこもり支援機関には「学校（小・中・高等学校）との連携ニーズ」があり、そのニーズを満たすためには「子どもと社会資源との橋渡し」「学校による社会資源との信頼関係づくり」が必要と考えており、それらは学校に求められるとしている。また、学校には軽度知的障害のある子どもに対して、その気づき難さや、他の頻発する子どもの課題への優先的対応から、「支援につなげられない現状」があることが示された。更に支援機関が学校の課題と認識しているものとして「教育組織課題」があり、「教育分野内での連携不足」や「学校教育の画一性が与える子どもへの影響」「校内資源の多様性確保の必要性」という課題が示された。

5. 考察

予防支援では学校在籍中から子どもやその保護者に対する継続したかかわりが重要になると考える。ひきこもり支援機関では、軽度知的障害に気づかないまま学校を卒業し、ひきこもりに至ったケースや、保護者や学校が子どもの障害への気づきはあったが、何らかの理由で対応されないまま、結果的に高校卒業後あるいは高校を中退し、ひきこもり状態になっているケースがある。軽度知的障害という見え辛い障害に対して、そして見ようとしなければ見えてこない子どもを取り巻く環境的な困難さに対してSSWの役割はどのようなものか、学校現場の実情を把握しながら、その視点や具体的支援方法を引き続き検討し整理する必要がある。本発表は、平成27-29年科研・研究代表山中徹二「SSWによる軽度知的障害、発達障害児・者へのひきこもり早期予防支援方法論の構築」の研究成果の一部である。